

持続的開発を考える

武内和彦

文部省の海外学術調査で、何度かアフリカに出かけている。昨年の秋も、ほんのひと月足らずだったが、かけ足で、マラウイ、ジンバブエ、ザンビアとまわり、人為的インパクトに伴う環境変化を調査した。

出かける直前に横浜で開かれた国際生態学会で私がオーガナザーをつとめたシンポジウムのテーマが「持続的土地利用システム確立のための生態学的原理」だったこともあって、アフリカの土地利用問題には関心があった。

とりわけ印象的だったのは、マラウイの土地利用である。この国には、農牧業以外に見るべき産業はない。ジンバブエ、ザンビアには支店を置く日本の商社も、商売にならないためか、まったく進出していない。たしかに、この国の経済水準は、ザンビア、ジンバブエに比べて著しく劣る。生活も貧しい。

にもかかわらず、人々の表情は明るい。土地利用は秩序だっていて、景観に落ち着きがある。街もきれいで、何よりも安全である。アフリカの他の国からこの国に来た人は、だれしもホッとするという。ここには、生活の貧しさをおぎなう、心の豊かさがある。

一方、同じ1964年に独立したザンビア。大量に産出する銅が、独立後の経済発展を支えていたが、銅の国際価格の暴落と、放漫な国の財政管理が災いして、今では深刻な経済危機に陥っている。都市ではしばしば暴動が起り、商店の窓は鉄格子がはまったままだ。旅行者は、毎日が緊張の連続である。

この二つの国を見て、私は、見るべき鉱物資源がなかったという消極的な理由であるにせよ、マラウイが農業を中心とした社会・経済システムの維持を選択したことは、正解だったと思う。そして、横浜のシンポジウムで話題になった持続的開発とは、マラウイで見られるような土地利用システムを確立させることではないかと考えた。

ところで、この持続的開発sustainable develop-

mentは、環境保全の分野で、最近よく使われ始めた言葉である。地域環境を保全しながら安定した経済社会を維持するには、環境資源の持続的利用が可能となるような開発、すなわち持続的開発が求められるからである。

この言葉が日本で広く知られるようになったのは、日本の提唱により設置された「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」の東京会議（1987年）で、報告書『地球の未来を守るためにOur Common Future』が公表されてからのことである。

ところで、持続的開発という訳語は、広い概念である英語のdevelopmentの内容を正しく伝えていないので問題である、という批判がある。環境破壊の最たる日本の開発が、悪い印象を与えている点も見逃せない。

持続的開発にかえて、持続的発展という訳語を使うべきだという人もいる。しかし、「発展」にも問題はあつた。発展という言葉は、より高次の社会・経済システムに移行することが善であるという考え方が潜んでいる。先進国と途上国を一つの物差しに乗せて、その格差の是正を求めるのは、本来、それぞれの国ごとにあるべきシステムの多様性をないがしろにした先進国の驕った発想である、というのである。

私は、いろいろ考えたすえ、やはり開発という言葉を使うべきだろうと思っている。開発は、地域の内在的なポテンシャルを引き出し、具現化させる行為であり、そのあり様は、地域の特性によって異なる。地域ごとに開発パラダイムが描かれるべきなのである。

しかし、今の日本の国際開発協力には、そうした視点が欠けていることも事実である。狭い意味での日本的な開発の押しつけが、アフリカでもまかり通っている。持続的開発という言葉が正しく理解されるような開発の考え方を浸透させていくことこそが、これからの日本に必要なと思うのである。
(東京大学)